

第一部

大村能章ものがたり

はじめに

生年月日 明治二十六年十二月十三日

没年月日 昭和三十七年一月二十三日(六十九歳)

(写真あり)

大村能章(国際劇場前)

いま、わたしたちが昭和という時代を振り返るとき、戦前・戦後の最もつらく、しかし最も活気に満ちた日々を決して忘れることはないでしょう。この慟哭の時期、我が国の歌謡界の四天王の一人として、中山晋平、古賀政男、江口夜詩らとともに、歌を通して我々に希望を与えてくれたヒットメーカー・大村能章が、我が防府市の輩出した偉大な歌謡作曲家であることは意外と知られていません。しかし、「旅笠道中」や「野崎小唄」、「麦と兵隊」、「同期の桜」などに代表される八、〇〇〇曲をも越える作品を、ポリドール、キング、コロムビアなどの各レコード会社から世に送り出すとともに、東海林太郎や音丸、菊池章子、平野愛子、照菊、榎本美佐江、森本徳司などの多くの歌手を育てあげた大村能章は、市民の憩いの場でもある毛利邸の近くで生まれ、松崎小学校から現在の多々良学園高等学校に学んだ防府ゆかりの人物なのです。

そして今から四年後の一九九三年には、この一世を風靡した男・大村能章の生誕一〇〇年を迎えます。

幼少の時代

大村能章は本名を大村秀弑といい、明治二十六年十二月十三日に佐波郡防府町大字東佐波令一九七二（現在の防府市多々良1の5の18）で生まれました。今でもその場所には、能章がかった産湯の水を汲んだという井戸が残されているそうです。生家大村家は、使用人も置いて米屋兼雑貨店を営

む名家だったようですが、母は、能章が五歳になったばかりの頃に協議離婚しており、その後、十歳頃に後妻に入った継母の手によって、単身十五歳で上京するまで多くの異母兄弟とともに育てられたようです。ちなみに、当時の大村商店を物語る唯一のものとして、「大村店」の文字の入った大徳利が、能章を偲ぶ有志の方の手によって大切に保管されているそうです。

(写真あり)

(写真あり)

大村家屋敷跡に残っていた能章先生の産湯を汲んだ井戸筒

能章（九歳三ヶ月）

小・中学時代

能章は、明治三十三年に松崎小学校に、そして明治三十九年に曹洞宗第四中学校（現在の多々良学園高等学校）に入學していましたが、当時は、まだ中学への進學率の極めて低い時代でしたから、かなりの有力者の子息で、親の理解も資産もあり、何よりも本人の進學の志が堅かったことを窺い知ることができます。この頃に能章は、すでに音楽の方面でその才能の片鱗を見せ始めており、いくつかのエピソードが多々良学園文芸部の機関誌『山かひ』にも追想の形で紹介されています。これによると、能章は毎日のようにバイオリンを演奏し、その腕前もなかなかのもので、通りがかりの人が思わず立ち止まって聴き惚れることもしばしばだったそうです。しかし、中学には二年あまり在籍しただけで、海軍軍樂生として明治四十二年には横須賀海兵団に入隊しています。この間の事情については幾つかの説がありますが、その頃の能章をよく知る方によると、能章が防府天満宮の“はだか坊”に参加して町中を練り歩いたことが厳しい學則に触れ、本人の意志によって自主的に中学を去ったのではないかというお話です。いずれにしても、宗門の學校としての厳格な校風が能章の肌合わなかったのかもしれない。

(写真あり)

曹洞宗第四中学校

海軍軍楽隊時代

(写真あり)

能章16歳 海軍軍楽隊入隊

能章は、十五歳のときに単身上京して横須賀海兵団に入隊し、海軍軍楽生としていよいよ本格的に音楽を学ぶことになりました。当時の海軍軍楽隊には、各県から一人入隊できるかできないかの非常に狭き門で、能章が入隊した明治四十二年には、全国で僅か五名しか合格していません。現在、東京芸大や桐朋音大、武蔵野音大、国立音大などをはじめとした有名音楽大学の合格定員が、各大学とも数百名に達すること

を考えれば、当時、音楽を志す人間がいくら少なかったとはいえ、その厳しさを容易に察することができます。ところで、軍楽生といっても一応軍隊ですから音楽の練習ばかりするわけにはいきません。カッターも漕がなければなりませんし、他にも様々な厳しい訓練を受けなければなりませんでした。ところが、能章は無類の音楽好きで、音楽をやるために軍楽生になったようなものですから、片時も音楽のことが頭から離れず、トイレにもバイオリンを抱えて行く始末で、食事のときにも色々なふしを即興で作っていたようです。また、こんな逸話もあります。能章が、一向に勉強する様子が無いのに、成績はいつも首席を占めていたので「大村は天才だ」と隊内でも評判になりましたが、実は、他の者が寝たあと、こっそり毛布の中に電灯を持ち込んで猛勉強していたのだということです。ちなみに、これよりずっと後になって、後進の育成に携わるようになってからも、能章は口癖のように「天才とは努力なり」と語っていたそうですが、彼の不屈の忍耐力と負けじ魂は、この頃からすでに具っていたようです。

突然の帰郷と苦難の日々

音楽を志していた能章にとって、海軍音楽隊時代は、最も充実した時期の一つだったと思われます。しかし、大正七年、父の死によって十年足らず過ぎた横須賀海兵団を去らなければならなくなります。家業の米屋を継ぐ為です、当然、これまでのように音楽に浸り切った生活を続けていく訳にはいきません。二十代半ばにして、音楽によって身を立てることをあきらめ、畑違いの商売を継がなければならなかったのですから、能章の無念さは察するに余りあります。

この突然の帰郷の後、大正九年、能章は二十六歳で防府市向島の御園生家三女ツネ子と正式に結婚し、長女美子も生まれています。しかしこの時期の日本は、全国的に構造的な不況とインフレにさいなまれており、米価高騰から米騒動が起こつたり、都市部でもストライキが激増、関東大震災にも襲われて社会不安がとみに高まっていました。能章が継いでいた「大村店」もこの荒波から逃れることができず、また、商売に不慣れなこともあって、次女艶子の誕生の後ついに倒産、下関に住む父方の叔母を頼って、幼女二人を連れての夜逃げに追い込まれてしまいました。

(写真あり)

能章、下関時代

下関での窮乏生活

下関に移ってからは、叔母の世話で豊町という所に住み門司鉄道局に勤務していましたが、実際には、昼間は下関駅の購買部で働き、夜は寿館という映画館で活動写真の画面と弁士に合わせてバイオリンを弾くという、かなりつらい生活をおくっていたようです。しかし、音楽に対する未練も捨て切れず、大正十一年には、門司鉄道局内に能章自らが「門鉄オーケストラ」を組織しその指導にあたりました。このオーケストラには、かつて能章も学んだ海軍軍楽隊の出身者も含まれており、地方にありながら質の高い演奏をめざしていたようです。その後、同十三年に、現下関市立美術館の名誉館長である河村氏によって「海峽オーケストラ」も結成され、このオーケストラの指導にも携わるようになります。このような下関での生活は約四年あまりにとどまりますが、この間の無声映画の伴奏や門鉄・海峽の両オーケストラの指導などは、作曲家大村能章にとって非常によい修業になったようです。それにしても生活は窮乏を極め、下関の海岸で貝を拾って食べ、飢えをしのいだこともあったそうです。このように貧乏な生活は、その後、作曲家を志して再び上京した後もまだまだ続くこととなります。

(写真あり)

下関海峽オーケストラ時代の珍しい写真 (中央は能章)

作曲家を志して再び上京

(写真あり)

若き日の大村能章（昭和十年頃）

「中央に出てもう一度音楽に打ち込んでみたら…」という先輩や友人の強い勧めを受けた能章は、大正十五年ついに意を決し、作曲家を志して再び東京へ向かいました。三十二歳にして人生の再スタートです。上京した能章は、かつて海軍軍楽長という要職に就いていた大先輩・島田晴誉の下で働くことになりました。といっても、下関の頃と同じように浅草の帝国館という映画館でバイオリンを弾いていた訳ですから、貧乏はまだまだ続いています。しかし、当時大流行だった「和洋合奏」は、実は、この島田晴誉が発明したもので、彼の下で働くことによって能章は、その作風に大きく影響を受けました。能章はくる日もくる日も映画館の薄暗く狭い地下室にこもって、長唄のレコードに耳を傾けて楽譜に置き換える仕事をしていました。有名な長唄や新内のさわりの部分を五線紙に引き写す作業で、つまり映画伴奏音楽のネタ取りをしていたわけです。陰にこもった随分憂鬱なものだったようですが、能章はこの仕事を通して日本音楽の真髄を身に付け、後に日本一の和洋合奏編曲者とまで言われるようになります。この約十年後に、一世を風靡した能章サウンドは、この薄暗い二畳の地下室から生まれたと言えるでしょう。

苦勞の多い能章家の生活

ところで、家庭の方は相も変わらずひどい貧乏所帯でしたが、いくらつらくても能章には貧乏や、やつれの影が全く無く、豪快に駄洒落を飛ばしながら、どんな仕事にでも厭な顔を見せることは無かったそうです。金策はもっぱら妻ツネ子の仕事で、兄弟や親類などに泣きついたりしてやつとの思いで貧乏を凌いでいたようです。家庭での能章は、仕事に関係したつらい話などは一切口にするとはなく、夕食のとき、晩酌のさかなに子どもたちに唱歌を歌わせて楽しんだりしていたそうです。しかし、何ととっても元は海軍軍人ですから、子どもに対する躰は厳しく、何時も「明治」を背負った古風な面を持つと同時に、一方では、近所の子どもたちに相撲を取らせて、ほうびに鉛筆を一本ずつ与えるという暖かい面も持ち合わせていたようです。いずれにしても、ものに執着しないのんきな性格だったので、ツネ子夫人には随分と苦勞をかけていたようです。このように、能章が窮乏ながら少しも卑屈になることなく、音楽で身をたてることを志していた頃、後に「能章とコンビを組んで人気歌手となる東海林太郎も、ちょうど満州から引き上げて東京の何処かで同じように貧乏に喘いでいました。彼らがヒット曲を世に送り出すようになるまで、もう少し時を待たなければなりません。

(写真あり)

今も表札がそのまま残る大村邸（東京都世田谷区若林）

日本歌謡学院を創立

こうした、能章にとって暗黒の生活にも、やがて曙光がさし始めます。まず昭和六年、東京九段に「日本歌謡学院」を設立するとともに、昭和八年には「レコード音楽芸術講義録」を出版、同時に歌謡曲の通信教育も始めるなど、意欲的に若手の育成に乗り出しました。東海林太郎や、音丸、菊池章子、榎本美佐江、平野愛子、織井茂子などをはじめとして、その他多くの歌手が能章から指導を受けています。作曲の方も次第に名実ともに備わった実力者となり、次々と傑作が生まれるようになります。そして、能章の黄金期を迎えるきつ

(写真あり)

大ヒットした「お駒恋姿」

かけとなったのが、昭和十年の「旅笠道中」の大ヒットです。これは清水次郎長誕生一二〇年記念に作られた映画「東海の顔役」の主題歌として、藤田まさとの詞に能章が曲を付け、東海林太郎が歌ったものですが、大人気となり約四十万枚を売り尽くしました。この時期はレコード歌謡第一期黄金時代と言われ、この「旅笠道中」の大ヒットによってポリドールレコード会社は、黄金の時代を迎えることとなりましたが、能章自身も、これにより日本調の流行歌に「大村調」の地歩を築くこととなります。その作曲数は八千曲を越え、古賀政男に次ぐ超スピード多作ぶりであったようです。ちなみに、古賀政男がギターを使って作曲していたのはよく知られていますが、大村能章は、幼少の折から親しんでいたバイオリンを片手に曲を作っていました。

(写真あり)

「明治一代女」主演の入江たか子

「藤田まさ」とのコンビ

能章の作った曲の中でも、傑作になったものの多くは、藤田まさとによって詞が作られています。大ヒットとなった「旅笠道中」や「明治一代女」「国定忠治の歌」「麦と兵隊」などは、凡て能章と藤田まさとのコンビによって生まれていま

す。しかし実際の二人の関係は、ひどく不仲だったそうである。能章の死後に藤田氏が自ら語った話によると、「氏が自分の詞に付けられた曲が気に入らぬと、能章に十一回も改作を迫り、二人の議論は殆ど決闘に及ぶところまでいった。」こともあったようです。また、能章の曲に対して、藤田氏が同人雑誌を通して厳しい批評を行ったところ、能章はその記事の部分を切り抜いて、紙が黄色に変色するまで自宅のピアノに貼り付けていたそうです。負けず嫌いで頑張り屋の能章の性格が、こういう面にも表わ

れています。いつもこんな風には不和であった二人ですが、藤田氏は能章の死去に際して「貴重な人でした。」と語ったり、ポリドールの創立二十五周年記念アルバム解説書において「僕は本当に大村能章は立派な作曲家だったと思うな。」と述べているところを見ると、能章と藤田まさとの関係とは、反発しながらも互いに認めあう仲だったのではないのでしょうか。

(写真あり)

能章、孫の一夫、藤田まさと先生 (写真左より)

「東海林太郎」と能章

(写真あり)

コンビの東海林太郎氏(当時)

ところで、能章と藤田まさとのコンビの他に、彼の曲を歌って大ヒットに導いた歌手・東海林太郎とのコンビも忘れることはできないでしょう。事実、能章と藤田、東海林の絶妙トリオによってヒットした曲は少なくありません。この東海林太郎と能章との出会いはどのようなものであったのでしょうか。能章の死後、顕彰碑(後章において詳述)の除幕式の

時に、氏自身が、その出会いについて思い出を語っておられるので、その言葉を少し紹介してみましよう。「私をはじめ先生にお目にかかった時、先生は私に、君の歌は下手である。わしに点をつけさせるなら、乙の下くらいのところだ、まあ、しっかり勉強しろと訓戒されました。…中略…私はそれ以来、一層一生懸命に努力した。そうして遂に『野崎小唄』をいただき、『麦と兵隊』その他、次ぎ次ぎに唄わせてもらうことができた。あの時、先生が甲の上とでもつけて下さっていたら、とでもついてゆけず今日の自分はなかったであろう。」東海林太郎に限らず、お弟子さんも非常に厳しい指導を受けられたようです。いつも軍隊式の教え方で、その上とても短気で、うまく歌えない部分があると、ピアノの鍵盤を激しく何度も叩いて教授しておられたようです。しかし、先の東海林氏の言葉からも窺い知ることができるように、厳しい反面、とても情に厚い面もあったようです。

「能章会」と「同章会」

能章が晩年、親交のあった人々とともに、恵まれない人々の為に慈善事業を行っていたことは、あまり知られていません。昭和三十四年に、能章の「音楽を通じてめぐまれない人々や病床にある人達に、生きる勇氣と希望を与えることはできないものか。」という言葉をきっかけに、慈善公演や社会福祉施設への慰問公演など、社会奉仕を目的とした「能章会」が発足しました。主だったメンバーを紹介しますと、藤

田まさとが名誉会長、三好正が会長を、菊池章子や平野愛子、照菊、榎本美佐江、森本徳司、などのお弟子さん達が役員を務め、その他会員には多くの詩人や作曲家、歌手、実業家などが参加していました。昭和三十七年に発起人であった能章が没した後は、会の名称を「能章会」から「同章会」に改め、以前と変わることなく今日までずっと社会奉仕事業が続けられています。ちなみに「同章会」の顧問には、服部良一や橋本勝見、堀内敬三、藤山一郎、古賀政男など、一部故人となった人々が名を連ねていました。

(写真あり)

母校、多々良学園で公演する大村能章

千葉、八柱霊園に眠る能章

能章が人々に惜しまれつつ、肺ガンによって亡くなったのは、昭和三十七年一月二十三日午後八時五分のことです。享年六十九歳、波乱の時代を生きた日本歌謡界を代表する作曲家でした。青山斎場で営まれた告別式には千人を越す人々が参列し、堀内敬三氏や服部良一氏、橋本勝見氏などの各界を

代表する方々が弔辞を捧げ、厳粛の中に故人の遺徳と業績を讃えました。今、能章は、千葉県松戸市新田にある八柱霊園に、妻ツネ子や若くして亡くなった長男泰章をはじめとした家族とともに静かに眠っています。同四十年の一月に建立された墓石には、右側面に能章の戒名である「衆伶院廓然能章居士」と、逝去の日付や享年、俗名が刻まれ、その隣に長男の戒名が続きます。その墓石の右隣に、能章の孫一同の志によって歌碑が立てられています。碑は縦一・二m、横一

・六mの大きなもので、「野崎小唄」楽譜の歌い出しの部分と一番の歌詞、漢字で「能章」ローマ字で「大村」のサインが刻まれています。

(写真あり)

大村家の墓所

(写真あり)

孫一同が贈った野崎小唄歌碑と「大村能章物語」の原作者山下英一氏

大村能章 顕彰碑

永遠に歌い続けられる能章の心

昭和四十二年十月三十日、市内多々良にある防府観光ホテルの庭園の一角に、大村能章を偲ぶ有志の手によって「顕彰碑」が建立されました。かつて大村家の隣に住んでおられて、能章と幼なじみでもあった中川雄作氏や、能章が二年間学んだ多々良学園（旧曹洞宗第四中学林）の発起によって実現したものです。碑の正面には「大村能章顕彰碑」の文字の下に、裏表紙に紹介した「野崎小唄」の一節を用いた能章直筆のサインが刻まれています。碑面の裏側には、元山口大学教授・岡田岩吉氏の作られた「大村能章はこの地で生まれ 今その霊は 懐かしの草園に戻ってきたのである。美しい故里の山河と 多くの友情にむかえられて」の一文が刻まれています。現在、この「顕彰碑」は佐波神社の鳥居の右隣に移されており、すぐそばを通っている旧山陽道からもよく見ることができます。

(写真あり)

昭和42年多々良生誕地に建立された顕彰碑に語りかける東海林太郎氏

(写真あり)

顕彰碑

(写真あり)

挨拶する碑建立の発起人の中川雄作氏

第二部

能章の主な作品の紹介

初の大ヒット作「旅笠道中」

清水次郎長の生誕一二〇年を記念して作られた映画「東海の顔役」（右太プロ作品／中川信夫監督／市川右太衛門、南光男、有島鏡子、白石明子主演／昭和十年二月公開）の主題歌として作られた「旅笠道中」は、旅人の仁義渡世を題材と

したやくざ調で、「夜が冷たい 心が寒い 渡り鳥かよ 俺らの旅は…」とつづく「やくざ渡世の哀れさ」を唄ったものですが、以後多く続いた「道中もの」の絶品と賞賛されるとともに、その第一号としてレコード流行歌界において大きな位置を占めました。このレコードは約四十万枚も売れ、能章の出世作となったばかりか、発売元のポリドール・レコード会社も、このヒットによって黄金時代を築くこととなります。

(写真あり)

「旅笠道中」の市川右太衛門

「野崎小唄」のルーツは…

(写真あり)

大ヒットとなった「野崎小唄」の
ポスター

(写真あり)

「お夏清十郎」主演の田中絹代（昭和11年）

今日、なお日本舞踊の伴奏音楽として人気のある「野崎小唄」は、古くから歌人として知られていた今中楓溪の歌詞に、能章が義太夫の『新版歌祭文』―野崎村の段―のメロディーを前奏や間奏に巧みに取り入れて艶歌調の曲を付けたもので、「お駒恋姿」との組み合わせで三十万枚以上を売って大ヒットとなりました。特に間奏の三味線の連弾きは、独特の日本情緒を醸し出すものとして有名です。しかし「野崎参りは屋形船でまいろ どこを向いても 菜の花ざかり…」と歌われるこの曲は、元々、野崎村の観光宣伝用の非売品のレコードだったのですが、その曲想はそれよりずっと以前に、防府において着想したものであったと言われています。

「同期の桜」のミステリー

『責様と俺とは同期の桜…』で始まるこの歌は、歌謡曲全盛の時代、他の軍歌が次第にすたれていくなかで、今日なお様々な年代の人々によって歌い続けられています。反面、最近の調査では、OLの「上司に歌ってほしくない歌」の第一位に掲げられているのも事実です。いずれにしても、これだけ長い期間、多くの人々によって親しまれた「同期の桜」が、これまで類を見ない超々ロングセラーであることは間違いありません。しかし、この曲が能章の手によるものと明確に示されたのは、そう古いことではありません。昭和五十八年六月二十一日の朝刊各紙は、司法によって「同期の桜」の作者は故大村能章氏であると判断されたことを報じています。それまでは、この曲の作曲者をめぐって諸説が入り乱れ、能章の没後、裁判沙汰にまでなりましたが、西條八十が、昭和十三年に『少女倶楽部』に掲載した「二輪の桜」という詩に能章が曲を付けたのが原曲で、この曲を「特攻隊・人間魚雷」の唯一の生き残りと言われている張佐裕氏が、海軍兵学校時代に少し変えて歌っていたのが、月日とともに序々に広まっていたのが真相のようです。ところが、当の能章自身は、この曲が自身の作であることを明かすことなく他界しました。この謎については、軍歌であったので遠慮して名乗り

でなかったとか、曲の持つ暗い過去を憚って名乗りでなかったとか、あるいは自分の作った曲だと気づかなかったとか、忘れてしまったとか、色々と推論されていますが、どれが本当のところかは今となっては知る由もありません。しかし、能章は生前二万曲以上を作曲したと言われ、その中で世に出たものだけでも八千曲を下らない事実を考えると、案外、能章は自身の曲と知りながら、単に放ったらかしにしていただけなのかもしれません。

(写真あり)

主な作品

年代	歌曲名	歌手	レコード会社
昭和八	野球おけさ 君に逢うとて	浅草吉奴 丸山和歌子	キング コロンビア
昭和九	恋の旅笠 旅は鼻唄	結城浩 東海林太郎	タイヘイ ポリドール
昭和十	雪の国境 弥栄おどり 旅笠道中	伊藤久男 佐藤寿 東海林太郎	コロンビア キング ポリドール
	長崎行進曲 お伝地獄の唄 灘は日本晴れ	東海林太郎 新橋喜代三 権藤円立	ポリドール ポリドール キング
	博多小女郎波枕 山よ曇るな	東海林太郎 三門順子	ポリドール キング
	野崎小唄 お駒恋姿	東海林太郎 新橋喜代三	ポリドール ポリドール
	明治一代女 三つ揃うて	新橋喜代三 東海林太郎	ポリドール キング
	旅芸人の唄 佐渡の子守唄	阿部幸次	ポリドール タイヘイ

年代	歌曲名	歌手	レコード会社
昭和十一	満州想えば 国定忠治の歌 遠い湯の町 お夏清十郎 丹下左膳の唄 博多夜船	音丸 東海林太郎 上原敏 東海林太郎 林伊佐緒 & 奥田英子	コロンビア ポリドール キング ポリドール タイヘイ コロンビア
昭和十二	満州吹雪 満州しぐれ	喜代丸 音丸	タイヘイ コロンビア
昭和十三	博多月夜 麦と兵隊 艦上機恙なし	音丸 東海林太郎 岡晴夫	コロンビア ポリドール キング
昭和十七	必勝歌	ラジオ国民合唱	キング
昭和二十	小判鮫の唄	小畑実	キング
昭和二十三	案山子踊り	尾崎幸江	新作民謡祭
昭和三十四	同期の桜	帳佐裕(作詞)	
☆不明			

※社会思想社発行日本流行歌史戦前篇 戦後篇より 抜粋

防府に関係のある曲

防府ばやし・防府小唄・防府行進曲
防府競輪音頭・防府競輪小唄等